

外例だけで(甲、第二卷、二七五頁——涅槃關係。甲、第一卷、二六六及び六〇〇頁參照)全く跡を絶つてゐる。要するに、犍陀羅派は、悉多達 Siddhartha 太子であつたものが、釋迦牟尼佛となつたまでの繪傳を、殆んど排他的に浮彫で現はしたのである。

### 中世派

こゝに於て、犍陀羅風の主想が、マツラー Mathura や、アマラーヴティ Amarāvati 第二期のもの、及び恒河流域に傳播の跡を辿れるかを考へて見れば、之にも其歴史は繰返すまでもないが、こゝでの目的に大切な内容を云つておく必要がある。已に犍陀羅後代の作品には、其の中心人物、即ち、菩薩或は佛陀について奇異の傾向に氣が附く。時には其の大きさが周圍の人々の二倍になつてゐる位、他の者に比して割合を大きくしてゐる。ベナレス附近で發見された笈多 Gupta 式の板彫では、此の傾向が一層著しい。(挿圖第五)之では、他の人物や背景を壓倒し、中心人物が額形面に出来るだけの場所を塞いでゐる。